

5月9日国頭中学校にて、学年研修会が行われた。各学年の1クラスを使って学年代表者が授業し、放課後、各学年関係の先生方で研究協議を行うスタイルである。

- 3校時 1年 音楽 T 先生 「探してみよう、歌い方」
- 4校時 2年 数学 K 先生 「単項式の除法を解くことができる。」
- 5校時 3年 国語 S 先生 「みどり色の記憶」

【3校時】 1年 音楽 S 先生 「探してみよう、歌い方」 (発声の難しい部分を探すねらい)

- (1) 旋律の流れを捉えながら、「声」の出し方を探らせる。
- (2) 声の出し方をお互いに探ることにより、自ら発声を工夫させる。
- (3) 一人だけでは「探り方」が分からないので、3~4人のグループを編成させて意見を交換させる。



写真①

【授業開始】

音楽室で初めての授業の授業観察である。教師もテンションを下げて進めることをかなり意識して挑戦している。

まずは、「校歌」を何の指示や指導もなく歌わせる(写真①)1年生である。中学校に入って初めて教科担任以外の先生方に授業の様子を見てもらう。生徒たちはかなり緊張気味である。

歌い終わったら、「どこが歌いにくいか？」グループで話し合う(写真②)。それぞれのグループで生徒一人ひとりの「気づき」が共有される(写真③)。生徒の発言を教師が黒板に板書し全体で共有する(写真④)。教師の挑戦である。音楽授業でどうやって生徒の「学び」を仕組むか？



写真②



写真③



写真④



「難しい」ところが共有されたら…ラララ♪で歌ってみよう。授業最初の歌よりかなりリラックスし声も出てきた。何よりも授業の節々で生徒の笑顔が見えることがうれしい。高い声から低い声、生徒たちの必死になって声を振り絞って出している姿がいい。

さらに「学び合い」に進む。教師は意図的に課題をグループにおろし「学び合い」を仕組む。教師：「どのようにすれば声が出しやすくなるだろうか？」再び生徒たちが気付きや、アイデアを出し合う。笑顔である。

授業終盤に『校歌』をもう一度歌ったが明らかに声が大きくなっていった。

【学年研修】



新任で来られた先生方にとってこの学年研修会がどのように受け止められたであろうか。教師の同僚性を高め、授業の質を高める。授業の質が高まれば、自ずと生徒の質が高まる。教師が互いに互見授業をかわし、不安や疑問を共有する。互恵的な教師の「学び合い」である。

小学校7校がひとつにまとめられた学級である。生徒にも間違いなく授業への不安がある。国頭中の先生方への期待が高まる。

【4校時】 2年 数学 K 先生

単元名：単項式の除法

本時の目標：単項式の除法を解くことができる。

個人テーマ：学び合いで基礎・基本の定着を図る。



写真①

K先生、前年度1年の育児休暇明けで4月からの復帰である。「学びの共同体」1年目の走り出しに、教師の表情や生徒の仕草を見とる眼の大切さをお話した覚えがある。この日も、必死に自分のテンションを抑えて、生徒のことを分かってあげようとする教師の姿勢（自分への挑戦の姿）を感じた（写真①）。

こちらも学年研修である、周囲の先生方の視線が熱い（写真②）。



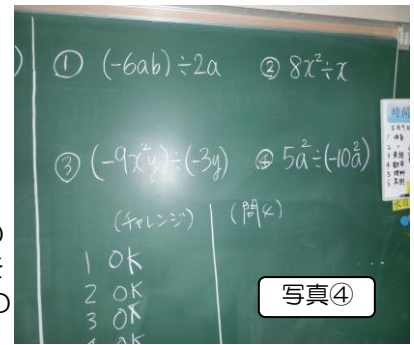
写真②

授業前半（写真③）、基本問題が教師主導型で共有された。一方的な説明でなく生徒たちに発問を投げて教師が「つなぎ」解答した。

生徒の反応もよい。授業開始時に制服の乱れた男子に服を正させる場面があった。「うれしかった」無視されたら、最後に「つらさ」を感じるのは生徒である。さらに養護教諭に手を引かれ、遅れて入ってきた2名の女の子にも一声ほしかった。「大丈夫？頑張ろうね。」これだけでいい。



写真③



写真④



写真⑤

【「学び合う」、「支え合う」、笑顔で挑戦！】

クラスの仲間たちがみんな身を乗り出して「語り合う」、「支え合う」である。（写真⑤）

どのグループも、「分からないこと」や、ちょっとした「気づき」を交流させる。

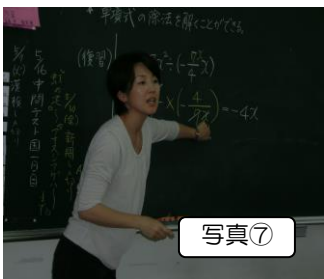
みんな笑顔である。素敵な授業風景である。「安心」できる。テストの点数なんかどうでもいい、そんな気持ちにさせる。『支え合う教室風景。』



写真⑥

依存する。支え合う。

【 教師の表情 】



写真⑦

実に、顔の表情をよく使う教師である。つまり無言のアプローチとメッセージが教師の全身から発せられていく。生徒も無視できない。言えることはやりすぎに注意、教師の側が疲れてしまう。（目線や仕草の使い方である。）

今日の授業で教師は問題①から④までを1問ごとにできたら教師に確かめて次の問題へ進むように指示していた。つまり、グループでは1問できるごとに教師の確認が必要となった。教師は確認のためグループ間を動き回ることになる。教師が動き回ると必ず教師依存が発生する。「自分たちで分かり合おう。」を大切にしたい。①の問題から④の問題までパターン化される。途中に「まちがいの共有でも仕組みとよかったのでは。授業終末のさらなる問題であった。これこそ生徒たちに任せるべき共有問題ではなかっただろうか（写真⑦）。

【 つながる 】
関われない生徒へのケア



写真⑧



写真⑨

個人的な学習能力は高いが、なかなか自分から仲間に関われない生徒たまによく居る？どことなくさみしい感じさえ受ける写真⑧であるが、ここで教師が意図的に周りの仲間へ「つなぐ」ケアを入れた。「つながった。」写真⑨。臍に落ちない女子への説明、これもどことなく楽しそうに語っている。両者のジャンプになる。

5校時 3年 国語 S 先生

単元名：「みどり色の記憶」 あさの あつこ

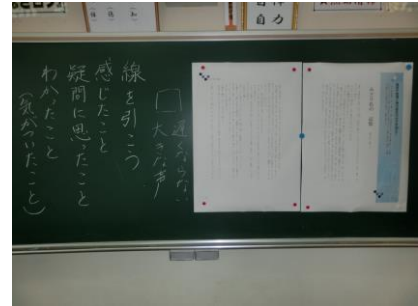
本時の目標：場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、自分の考えを持つ。

【 淡々とした授業開始】



この字に構え、教師はすわりテンションを下げ、淡々と授業開始。国頭中の先生方もだいぶ慣れてきた(写真①)。村内の小学校でも、ほとんどの国語の授業は、黒板に大型教科書(自作)を提示して、みんなの書き込みを共有し授業を進める。各々の子ども達の考えを共有し学びが深まる。

【国語の授業の必需品大型教科書】



【 読む、読み込む 】



教師が本時の授業の流れを確認。



「文学に親しむ」ためには、とにかく「読む」である。読み込みが浅いと、「思い」も、「疑問」も出てこない。とにかく読み込む行為が大切である。「読ませ方」は教師それぞれのアイデアと工夫に委ねたい。

【 書き込み 】



「書き込み」、必死に書き込む女の子。これまでの自分の体験、これまでの様々な「思い」を巡らせて書き込まれる。一人一人の生徒の大切な「個の思い」であることを大切にしたい。この女の子の書き込みはぜひ取り上げたかった。

【 分からないことは 】



わからない漢字や、語句が出てきたら自分たちで「調べる」は当たり前、教師に指示される事でもない。対話の中でも、仲間から発せられる言葉に「どう言う意味？」があって当たり前である。分からないことは決して恥ずかしいことではない。

【 伝える 】



伝える。私の思いを「分かってもらうために伝える。」だけど…たどたどしいが、何とか頑張る。途中行き詰る仲間に「がんばれ」の小さな声がおくられた。素敵な学級である。支える仲間がいるから私は頑張れる。笑顔である。

【 ジャンプ課題 】

教師：「なぜタイトルが『みどり色の記憶』なの？」
文中に「みどり色」とは一切出てこないのに「どうして？」である。
生徒たち考える。予測する。「訊き合う」当然テキストに直接書かれているわけでもない。自分で読みとって作品から考えていくしかない。
生徒：漢字でないわけはどうして？
生徒：「みどり」が漢字でないことがいろんな意味を持たせている。
生徒：ひらがなは、おさない頃の話であることを…。
◎「正解」も「まちがい」もない。いい発問であった。
まさに、文学から創造する→授業を創造するである。



▲ 課題を下して、語り合う時間が短い、もっとゆとりを持ちたい、難しい課題がやりがいがある。教師で授業前半に時間を費やし、後半の時間切れがよくある。「授業導入」を大切には、時間をかけなさいという意味ではない。興味・関心を引き付け、素早く課題を下すことである。